

---

# 一月遅れのバレンタイン

奈月七瀬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一月遅れのバレンタイン

### 【Nコード】

N4417G

### 【作者名】

奈月七瀬

### 【あらすじ】

1ヶ月遅れでバレンタインのプレゼントだといわれ告られたのはいいけれど、相手は同性の男ってどういうことだよ。

## （前書き）

誰でも読めるボーイズものとして書いてみました。毛嫌いせず、一度お読みいただければ幸いです。

終業式まであと数えるほどになった三月十四日、たがしゅんや田淵俊也はある物を意外な人物からもらうことになる。

「あの…これ…受け取ってくれませんか」

夕暮れ時のいい雰囲気あたりを包んでいる時だった。裏道のそのまた小さな奥の路地なのであたりには誰もいず二人だけである。それはどう見ても俊也に対してのプレゼントに違いない。綺麗にラッピングが施してあり、赤いリボンが綺麗な花形に飾られている。プレゼントを贈られて嬉しくない奴なんていないと思う。だけどこの時俊也は戸惑いの方が先に来ていた。

「どういうこと?? なんで俺に?」

「えっ! なんてっていわれても困るんだけど…受け取って欲しくって」

恥ずかしそうに顔をちょっと赤らめてそういわれても、それが女の子であれば俊也も嬉しいのだが、

「あんな、変なこと聞くけども、お前男だよな」

「うん。そうだよ」

自分の目に狂いがなかったということを確信できた俊也は少し安心したものの、

「お前男なんだよな。じゃ、どうして俺にそんなプレゼントなんか渡すんだよ。俺も男だぜ。……ひょっとして、わかって渡すのか?」

「わかって渡すんだよ。…だって俺」

「うそっ!! わっわー!! 言うな。全部言うな。わかったわかったから……」

「なにがわかったんだよ」

ジリッと一歩踏み出したその男の動作と同時に、俊也は一歩後ずさった。

「ごめん。ほんつと俺駄目なんだ……頼むから……こっち来ないでくれよ。なっ頼む」

「なにが駄目なんだよ」

「だってさお前……ひよつとしなくても……その……ほら、あれ……ゲ……イ？　って奴だろう。えっ！　違う！？」

寂しそうな顔をして、そいつはガツクリと肩を落とした。

「やっぱり……やめればよかった」

ポツリとそれだけいうと顔を上げて、

「ごめんね。嫌な思いさせちゃったね。……今の忘れて……それじゃ」  
涙目で無理に笑顔を作っているのが一目でわかる。言いたいことだけいって、わけのわからないままの俊也を置いてそいつは去っていくとしてる。

気になって仕方がない。それになにかこのままでは、俊也が悪いことをしてしまったように思えてならない。

小さな体を半分ぐらいに折りたたんで、そいつはトポトポ歩いていく。

「おい！！　ちょっと待ってくれよ！！」

すぐに追いついた俊也は、

「あのさ、俺小腹減ってたんだ。……今度駅前に出来たピザの店行かないか？　美味いらしいんだ。どう？」

聞くまでもなくそいつは頷いていた。

なんか気持ちの悪いもの、そう俊也は同性愛者のことを感じて思っていた。雑誌やテレビなどに出て来るそういう人達を見てのイメージしかなかったからだ。

だけど実際今日の前にいるそいつを見ると、そんな事はなかった。極々普通の奴だ。

描いていたものとは違うことで、俊也の中での嫌悪感が消え去ってしまったという感じた。

お腹をパンパンと叩いて満足そうな顔をして店から俊也は出て来

た。評判通りで、その店のピザは美味かった。

「美味かったな」

「うん。美味しかった」

そんな感想をそいつは言っただけで、殆ど俊也一人が食べていた。

「お前の家って、どっちの方向？」

「こっち側じゃなくて、反対方向なんだ」

「ふうーんっ。じゃ、俺と一緒に帰ろうぜ」

黙ったままで二人は歩き出した。そこで俊也はあらためて、

「そういえばお前の名前聞いてなかったよな。クラスは……別だよな？」

その言葉を聞いたとたんに、そいつは立ち止まってしまった。

「酷いな。もうすぐしたら終業式だって言うのに、憶えてないんだ。

……シヨック」

「えっ！！ほんと、一緒にクラスだったっけ？？」

「ましますそいつは頂垂れてしまった。

「赤居俊樹。あかいとしき……俺って、そんなに目立たないかな？　っていうよ

りも、存在感ない？」

「赤居？　赤居、赤居。ああっ、思い出した。あの根暗の……わり  
いっ」

アスファルトにもしこの時穴があいていたら、俊樹は入って出て  
こなかったに違いないだろう。

とうとう俊也も立ち止まり、俊樹の肩を叩いて、

「ごめんよ。お前ってその、あんまりクラスの連中と溶け込んでな  
いじゃないか……だから……その……ごめんな」

やっと頭を上げて、そいつは俊也を見上げた。

「いいよ。別に。俺って自分からそう仕掛けてるところあるしな」

それが俊也にとって不思議でなかった。クラスの誰とも打ち  
解けようとしていない俊樹が、俊也には理解できない存在でありわから  
ないものであった。

「あのさ、お前がみんなを避けていた理由って……その……」

「うん。言いたいことわかるよ。そうだよ。自分のこの普通の人  
持っていない、同性を好きになっちゃうっていうことがあったから  
なんだよね」

二人は、駅を過ぎ近くにある神社に入っていく。この方が話が  
しやすいからだ。ちょうど良いところに、ベンチもある。

「あそこ座って話そうか」

「いいの？ 俺のこと気持ち悪いって……いつてなかった？」

「えっ。いつてたっけなそんな事……まあいいじゃない」

ドカリと側にあつたベンチに腰掛け、隣へ座るように俊樹を促し  
ている。殆ど両端とっていい位置に二人は座った。

「そのさ……、赤居ってほんとに男しか駄目なのかよ」

「そうだよ。小さい時に女の子に虐められちゃって、それ以来女の  
子のこと怖くなっちゃったんだ」

「そうなんだ。……でお前ひよつとしなくても俺のこと……」

「う…うん」

消えそうな声で、返事しているところが俊也には何故か可愛く見  
えてしまった。確かに俊樹は自分より背が低いし童顔である。

「俺、家の都合で引越するんだ」

「いつ」

「明後日……」

「凄え急なんだな」

「前々から話はあつたんだ。本決まりになつたのがこの間で」

一呼吸置いたあとで俊樹は、静かに語り始めた。

「名前が、同じ字があるだろう。それにお前俺のタイプだったし…  
…。ずっと気になってたんだよな。だけど、こんな気持ちいたら  
もう二度と話してもらえないだろうし……。だからずっと今まで黙  
ってたんだけど。引越するって聞いたから、それで俺……」

「思い切って、打ち明けたってわけ？」

「うん。けどごめん。気持ち悪いさせちゃったんだよな。……け  
どよかったかもな。……俺的にはだけどな」

へへッと笑った顔も、結構可愛い。

「全然印象に残ってなかった俺が、気持ち悪い奴としてだけれどお前の記憶の片隅にいられるんだもん。それだけでいいや」

「ほんとに、それだけでいいのか」

不思議そうな顔をして、俊樹は俊也の顔を覗き込んでくる。

「そんな悲しい思い出だけでいいのかよ。これからは、なにもなくつていいのか」

意外な言葉が俊也から飛び出してきたので、俊樹の目は見開かれ驚きの表情を表わしている。

「俺は、お前の思いには答えてやることは出来ないけど、それでも友達としてならいいじゃないか。そうだろう。違うか」

「俺はそれで嬉しいけど、お前がさつき気持ち悪いって……」

「うん。いった。だけどそれは、やっぱりさちよつと偏見があったわけよ。いるっていうのは知ってるさ、そういう人間が。だけど実際目の前にすると思わなかったし、ましてやこんなに身近にいるとは思わなかったし、つい口からああいう言葉が出ちゃって……ごめんよ」

「いやまああいう反応が返ってくる方が多いから、別に何ともないけど」

「携帯の番号と、アドレス教えてくれよ。俺のも教えるからさ」

そのあとの俊樹の返事は、意外なものだった。

普段ならベッドの中に入ったらすぐに寝られる俊也なのだが、今晩はなかなか寝付かれない。

「もう、なんでこんなにあいつのことが気になるんだよ。ったく」  
なかなか俊樹のことが頭から離れない。

今まで何度か女と付き合ったことがある。それでも結構もてるんだと自負していた。

「その俺がだよ。なんで男とわざわざ付き合うかどうかで悩むんだ



よ」

あんな奴、初めてだ。それが俊也の思いだった。

「女でも、あんなに消極的な奴今いないもんな」

昔の言葉でいう奥床しいというものであるが、言葉の意味自体が死語になりつつあるので俊也のボキャブラリーにはない。

机の上に置いてある俊樹からの手渡されたプレゼントは、携帯のストラップだった。中には手紙が添えてあり携帯の番号が書いてあった。

『携帯の番号と、アドレス教えてくれよ。俺も教えるからさ』

『この中に書いてあるから……。手紙読んでくれて、もしよかったら。俺、いつでも待つてるから』

そんなことをいつていた。

手紙の内容は、ほんの些細な日常生活のことから始まり、俊樹の性癖に対するカミングアウトが記してあった。

幼い時に女の子に虐められて、それ以来女の子が怖くなり男の子にしか興味がわかなくなってしまったことなど会って話をしたことが丁寧な文字で綴られていた。

そして一気に俊也に対する思いへと続いていき最後には、

『俺のこんな思いが通じるわけないと思います。だけど伝えずにはいられなかった。田淵俊也という人に出会え、ほんの一時の間でも同じ時間を共有できたことに、俺は感謝しています。つたない文章の君にとっては気分を害するかも知れない手紙を、最後まで読んでくれてありがとう』

まいったなあーっと、頭をかきつつ手紙を持ったままベッドに寝ころんだ。

なにを悩んでいるのかが、俊也自身にもわからなかった。友達、そう友達の一人としてあとほんの数日顔を合わせればいい。そう思えばいいものを、何故か悩んでいる。

「なんだろう。この気持ちって……。わかんないなーっ」

もやもやしたものがずっと胸の中で燻っている。それは収まると

ころか、ますます増えていく。

「一つだけはつきりしていることは、俺はあいつが嫌いじゃないって事なんだよな。それだけわかればいいか。そうだよな」

そう今はそれだけの気持ちかわかればいい。明日会ってお礼をいおう。携帯のストラップにお休みの挨拶をして俊也は眠りについた。

## （後書き）

つたないままの文章を、最後まで読んでくださりありがとうございます。  
ました。

これからも、ちよくちよくいろんなものを随時アップしていきたい  
と思っていますので、よろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4417g/>

---

一月遅れのバレンタイン

2010年10月8日15時08分発行